

## ヒ ッ タ イ ト 歴 史 地 理 考 (Ⅱ)

岸 本 通 夫

### II. Arzawa 諸国について (つづき)

本誌第7号に掲載せられたこの論文の初章においては、Gurney, Garstang 両氏の所説のうち、

- 1) Arzawa=Lydia, Apasa=Ephesus
- 2) Ahhiyawa=Achaioi の国<sup>1)</sup>, etc.
- 3) Lukka=Lycia, Dalawa=Tiös, Hinduwa=Candyba<sup>2)</sup>, etc.

の比定を一先ず承認し、この三項を基本的前提として、Hatti 国の首都 Hattus より Arzawa 国に向う道筋、特に Mursilis II が、A. 国を征討したときの進軍路について私見を述べた。ひき続いて本稿では、Arzawa 諸邦、すなわち、Murs. II が同国を平定したのち、これを分割して授封した Arzawa 本国と Mira-Kuwaliya の国、Sehac川国、Hapalla 国のうちの後の三国について、G., G. 両氏乃至 C. 氏の見解を検討してみたい。

#### a) Mira-Kuwaliya 国について

条約等の文書において Kuwaliya 国の名がほとんど常に Mira 国と併称されて見えることは、GGG p. 89 に指摘されている通りであるから、ここでもこの両国は一括して考察することにする。Kuwaliya 国は、Mira 国に接壤し、これに附帯的な位置を占める比較的狭小な国であったものであろう。

因みにここで言い添えておくならば、このほか、Kuwaliyatta 山、Kuwalapassa の地名が見出だされ、一方 Luwi 語 (以下 luw. と略) に kuwali- なる動詞語幹があるという<sup>3)</sup>。あるいは、idg. \* $\sqrt{k^{w}el}$ - ‘廻る、世話する’ : skr. *cārati*, hom. *πέλομαι*, *κύκλος*, lat. *colo*, etc. と結び付く語根を含むものかも知れない<sup>4)</sup>。さて、Gurney らは Kuwalapassa を cl. Colbasa に比定し、Cornelius は Kuwaliya の名を Celaenae に引

## ヒッタイト歴史地理考(Ⅱ)

き当てようとするが<sup>5)</sup>、音論の観点からするかぎり、heth., luw. *Kuwal-*:cl. *Col-*と対応せしめる方が難がないであろう。*κολόκυνβα* ‘かぼちゃ’, *κολοσσός* ‘巨像’, *κολοσσαί*, *κολοφών*<sup>6)</sup>などの背後には、luw. *kuwal(i)-*がかくれているのかも知れない。

余談にわたったが、Mira国の位置を考えてみることをこそ先決問題である。Mursilis Ⅱが Mira-Kuwaliya 国の Kupanta-Innaras 王に対して結んだ条約<sup>7)</sup>から得られる地理上の data は：

- i) かつて同国の Mashuiluwas 王が、Hatti国の主権の下に属する Pitassa 地方を煽動して、Hatti 国の辺境を騒がせたことがあること、
- ii) Astarpa川と Siyanta川とが、M.-K.国と Hatti国との境界をなすこと、
- iii) Aura が両国の国境線からあまり遠くなく、しかも同市は Hatti 国の方に属していること、

の三点に要約することができる<sup>8)</sup>。

まずその i) から考えるならば、M.-K. 国は、Hatti 国から見てその領内の Pitassa 国のすぐ外側にあったとするのが自然であろう。従って、Pit. 国の位置について予め精確な概念を得ておくことが必要である。ここでは、この問題について詳細に立ち入ることを控えるが、GGG p. 74 に従えば、同国はいわゆる「下の国 Kattera Udne」, すなわち、大塩湖 (tk. Tuz Göl=cl. Tatta Lacus) をめぐる高原中央部南寄りの大盆地の、その西南境の一区画——一層精密には、Sultan Dağ 山脈の東北面に横たわる山麓丘陵地 foot-hills と Axylon ‘無木’の野の荒蕪地とがこの国に宛てられている。およその見当については、筆者もこの比定については異議がないが、私見によれば、Pit. 国の境域は、今少し西に寄せ、かつ一層広い地域を含んだとするのがよいのではないかと考える。

その理由はまず、Pitassa の名そのものにある。そもそも Pitassa は、原の綴りに従えば pi-i-ta-aš-ša, pi-e-da-aš-ša のように書かれ、むしろ Pedassa と表わす方が原音に即した表記法と考えられる<sup>9)</sup>。そこで Laroche とともに、Pitassa または Pedassa は、現実のどの Πιδάσος に当るかは一応別の問題として、ともかく地名そのものとしては、gr. Πιδάσος の原形に他ならないと見ることができよう<sup>10)</sup>。さて、この名の地名は、Hias に二つ——Troia の Π. (z 21, 35, φ 87) と Messenia の Π. (I 152, 294) ——が指摘されるほか、Strabo (XIII. 1. 59=§ 611) によれば、Caria に Πιδάσαと Πιδάσωνのあったことが知られるが、かようにいくつもの Π. の存したことから考えて、この地名は、何か地形に関する appellativum に起源を持つものではないかとの推定が許され

よう。それでは、 $\Pi\delta\alpha\sigma\sigma$  < luw. pedassa として、この luw. (または heth.<sup>11)</sup>) の名詞または形容詞は、いかなる意味をもっていたであろうか。Troia の  $\Pi$  は、z 35 では  $\Pi\delta\alpha\sigma\sigma\alpha\iota\pi\epsilon\iota\omega\gamma\upsilon$ ,  $\Phi$  87 では  $\Pi$ .  $\alpha\iota\pi\eta\tau\epsilon\sigma\sigma\alpha\upsilon$  と、いずれも‘そば立てる’の意味の epitheton が添えられている。思うに Troia の  $\Pi$  は、Satnioeis の河岸の切り立った断崖に臨んでいたのであろう。Messenia の  $\Pi$  は、後代にはその situs が不明になったようであるが、Pausanias (IV. 34.4; 35. 1) および Strabo (VIII. 4. 3=§ 359; 4.5=§ 360) から、Methone と Corone のいずれか一方を  $\Pi$  に、他を  $\Lambda\iota\pi\epsilon\iota\alpha$  ‘そば立つ(市邑)、山阻やまごさげの地’に比定する説のあったことが知られる。 $\Lambda\iota\pi\epsilon\iota\alpha$  は、Ilias の同じ行で  $\Pi$ . と並び称せられている都邑であるが、Methone, Corone のいずれにしても、それを  $\Lambda\iota\pi\epsilon\iota\alpha$  に擬する説のあった以上、両地とも海岸の断崖上にあることと思われる。しかしとすれば、両地のいずれが  $\Pi$  に宛てられるにしても、とにかく  $\Pi$  は、海岸の絶壁上の市邑であったものと結論することができる。以上のような僅かな材料に基づいて、luw. pedassa > gr.  $\Pi\delta\alpha\sigma\sigma$  の意味を測ることの危険はいうまでもないが、luw. の形容詞 pedassi.<sup>12)</sup> に、もともと‘そば立てる、険阻なる’のような意味があり、名詞として転用せられて、そのような地形の土地を指す名となった可能性もなくはなからう。かような推定が許されるならば、Pedassa 国は、Sultan Dağ の山麓丘陵などではなく、この山脈そのものを含み、tk. Beyşehir Göl=cl. Coralis Palus, tk. Egridir Göl 等の大小の湖水を点綴する、Taurus 山脈西端部の山岳地帯、換言すれば、Pisidia を主として、その西面・北面をも含む一帯に比定する方がむしろ妥当ではあるまいか。この比定に従うならば、P. 国は一層長大な境界線で M.-K. 国に接壤することになるという点でも、Gurney らの見方に勝ると思われるが、この点については後述する所がある。

ともあれ、M.-K. 国は、上述の Pedassa 地方の西側にあったとするのがもっとも自然であろう。

つぎに第 ii) 点に関していうならば、GGG では、Sallapa=cl. Pessinus, tk. Sivri Hisar; Aura=Amorion とおいた結果、Astarpa 川=cl. Cayster<sup>13)</sup>, tk. Akar Çay とせざるを得なくなった。この前提に立って、M.-K. 国と Hatti 国との境界を考えるならば、Astarpa 川とともに、すなわち同川に接続して、この国境線をなす Siyanta 川<sup>14)</sup> としては、GGG p. 91 のとおり、源頭においてほぼ Cayster 川と相続く所の cl. Senarus Fl.=tk. Banaz Su をこれに当てはめるほかあるまいが、筆者の見方に立って、西方 Arzawa 方面への前進基地 Sallapa の situs として、cl. Acroenus=tk.

Afyon Karahisar を択ぶならば、Aura は、これより西南方のいずこかに求められねばならず<sup>15)</sup>、Astarpa 川に対しては、Lycus 川または Caprus 川を宛てたことも前稿の通りである<sup>16)</sup>。筆者としては、以上の前提のもとに Siyanta 川に当る河川を探さねばならない。

さて Caprus は、Laodiceia の辺りで Lycus Fl.=tk. Çoruk Su に流れ込み (Strabo, XIV. 8. 15=§ 578)、やがてその Lycus 川も程なく Maeander の本流に投ずるのであるから、Astarpa 川に接続して M.-K. 国の国境をなす Siyanta 川には、一応は Maeander 本流を考へることもできるが、M. 川下流は、その兩岸こそ正に Arzawa 本国の境域にほかならないのであるから、Lycus 川との合流点より下流の M. 川が、M.-K. 国と Hatti 国との国境をなすと見るのは適当でなからう。それでは合流点より上流の M. 川をこの国境に宛ててはどうかというのに、それでは、L. 川と M. 川上流とのつくる線より西に横たわるべき M.-K. 国は、この両川の線によって Hatti 国の領土を、たとえその一部をにもせよ、馬蹄状に包囲する形勢を示すことになり、これもまた素直には受け取り難い布置をなすものといわねばなるまい。

そこで翻って、GGG における試ろみと同様に、C. 川または L. 川の水源の方で、ほぼこれと接続するような河川はないものかどうかを質ねてみる。正しく条件に適するのは、Calbis Fl. すなわち今の Dalaman Su である。決定的な論拠ではありえないが、Siyanta 川=Calbis Fl. とおくことの一傍証たりうるかとも解せられる一つの地名がある。すなわち、Phrygia と Caria との境にあったとされる Sinda の市である。その位置については、Strabo (XII. 7. 2=§ 570; XIII. 4. 14=§ 630) によっても明確な記載がなく、従ってこの市が Calbis 川の畔にあったことを断ずる根拠はないが、およその位置は、この川の中流以上の流域にあったと推定することができる上に、Calbis 川が Taurus 山脈の西の起端をなす険阻な山塊の間を貫流していることを考えれば、古典期の Sinda 市が、Calbis 川上流の狭い谿谷中におかれた都邑であったとの推定は、おそらく余り当をはずれた臆測ではあるまいかと思われる。かくして、cl. Sinda の名は、さらに古代の Siyanta の名に発しており、かつまた Siyanta>Sinda の都市名は、この市の傍を流れる Siyanta 川と共通の起源をもつ可能性があろうと推測することもできよう<sup>17)</sup>。

なお Siyanta 川=Calbis Fl. とするならば、これに接続して国境線をなす Astarpa 川としては、Caprus 川よりも Lycus 川を択ぶ方がつながり方に難がない。かくしてここに至って、Astarpa 川=Lycus Fl. として、我々の比定を一層明確ならしめるこ

とができる。

最後に第 iii) 点について考察を試ろみ、あわせてこの機に前稿に論じた Aura の位置<sup>18)</sup>に多少の修正を加えることにする。条約の §9——国境線の諸目標を記した条項一に、「しかしながら汝(=M.-K. 国王)は、越えて Aura 市には入るべからず」との文言が見える<sup>19)</sup>。もとより「国境を越えて A. 市に入って来てはならぬ」という意味であって、この文言からは、A. 市が、M.-K. 国より、Ast. 川=Lycus と Siy. 川=Calbis とのつくる国境を越えて程遠からぬ所、あるいはむしろ両川のいずれか一方の東岸そのものにあったことを推定するのが自然であろう。Murs. II の Arzawa 征討に際し、Aura 市はその進軍の道筋に当たっていて、M.-K. 国の先代の王 Mashuiluwas が Murs. II を同市まで迎えに出たことを想起すれば、A. 市は、両川のうちでは、Ast. 川=Lycus の右岸に位したものと考えるのがよからう<sup>20)</sup>。

さらに付言すれば、同じ §9 に「Ast. 川(の方面)では、Kuwaliya 国をもって汝の(国の)国境とする」の一句があるので、K. 国と称するのは、Astarpa=Lycus 川の直ぐ西岸に当る地域を指すものと理解され、それでは Mira 国は、Siyanta=Calbis 川の西岸に当ることが推量される。かように考えれば、K. 国は、M. 国に比して可成り狭小であり、K. 国の名がいつも付随的に言われている事実にもよく適合する<sup>21)</sup>。

なお上述した Pitassa 地方については、その西境が、Siyanta=Calbis Fl. の上流にまで及んでいたものと見るならば、P. 地方は、M.-K. 国と同川上流の線で境を接することになり、P. 地方の名がしばしば Mira 国乃至 Siy. 川との関連において言及せられる事実も充分な説明を得ることになる<sup>22)</sup>。

かくして、西方はどの辺にまで及ぶかが明らかでないが、ともかく M.-K. 国の境域としては、cl. Lycus=tk. Çoruk Su, cl. Calbis=tk. Dalaman Su の両河の線より西、従って両河の西岸にわたかまる Cadmus 山塊の南と北の地域を宛てることができ、かつ、さらに詳しくは、Lycus 西岸を K. 国に、Calbis 西岸を M. 国に比定することができた。Calbis 西岸すなわち Cadmus 山の南方は、南はどの辺までが M. 国の領域であったであろうか。Dalawa=Tlos, Hinduwa=Candyba, Arinna=lyk. Arīna, cl. Xanthus 等の、固有の Lycia の諸都市のみならず、なお西方の Iyalanda=Alinda, Waliwanda=Alabanda 等の Caria の諸市も、Lukka 地方の内に含まれているのであるから、Calbis 川下流の沿岸地方は、Lukka 国に属するとせねばならず、従って Mira 国の領域は、精々 Calbis 川中流あたりまでとせねばなるまい。

b) **Siyanta 川国, Zippasla 山国**について

その後 Murs. II の孫 Urhi-Tesup 王 (ca. 1282-75) の頃を最後として Mira 国の名が記録に現われなくなり、おそらく Kuwaliya 国を除く固有の Mira 国——すなわち Siyanta 川=Calbis Fl. の西岸の国——が、改めて Siyanta 川国または Zippasla 山国の名のもとに、U.-T. 王の従弟に当る Tuthaliyas IV (ca. 1250-20) から梟雄 Madduwattas に授けられるに至ったと見える経緯は、ほぼ GGG pp. 90-91 の所説に従ってよいが、Gurney らが、M.-K. 国と Siyanta 川国=Zippasla 山国とをまったく相等しいものと解しているのには異議なきを得ず、私見によれば、まず、Kuwaliya 国すなわち Lycus 川西岸は、Madduwattas の所領より除かるべきであろうし、また Siyanta 川国は、およそ Mira 国に等しいにしても、名を改めて呼ばれる以上は、やはりそれだけの理由があったのであって、すなわち、新に名付けられた Siy. 川国は、もとの Mira 国を含みながら、これよりも広い境域を指し、この川に沿ってその河口に至るまでの西岸一帯を呼んだものと見るのがよいと考える。

さて Siyanta 川国=Zippasla 山国について論ずるための史料は、正しく Madduwattas 文書<sup>23)</sup>にはかならないが、Siy. 川国の境域として、Siy. 川=Calbis Fl. の西岸地方を考えるならば、この境域は、同文書の記述する所に対してまことによく適合することが見出される。以下同文書に即して、この点の検証を試みよう。

まず、Madduwattas は、Ahhiya の人 Attarissiyas (Attariššiyaš LÚ URUahhiya —KUB XIV 1 I 1) に所領を逐われて、Hatti 国王のもとに身を寄せ、同王から、文書の始めには Zippasla 山国 (I 15 et sqq.) と称せられ、文書の後半 (II 11 et sqq.) では Siyanta 川国と呼ばれている国を封土として授けられたのであった。Attarissiyas が Atreus に当る名かどうかは今論じないが<sup>24)</sup>、Madduwattas 自身は、何民族に属するのであろうか。Croesus の父 Alyattes, 祖父 Sadyattes の名との後半部の類似が指摘されている一方、luw. 風の地名 Maddu-nassa と共通の語幹を含んでいることも否定できない<sup>25)</sup>。詳しくは別の機会に譲り、結論のみを記せば、ヒッタイト史の末期を飾るこの奸雄は、やはり Luwi 族の士分の出であったように思われる。Attarissiyas に奪われたもとの所領がどこであったかは、文書に記載がないが、ともあれ、Gurney らの説くように、Ahhiya(wa) 国が Mycenae に根拠をおく Achaea 人の国であるならば<sup>26)</sup>、その Ahhiya 人の一人から国を逐われた Luwi 人に Hatti の王の授封する領国は、やはり半島西辺の沿岸地帯のいづこかと見るのがもっとも自然なのではあるまいか。GGG の M.-K. 国=Zippasla 山国=Siyanta 川国<sup>27)</sup>が、cl. Senarus 川=tk. Banaz

Su, cl. Dindymus 山=tk. Murad Dağ, cl. Cayster 川=tk. Akar Çay をつなぐ線より南方の山岳地——すなわち筆者の Pitassa 国に当る地方<sup>28)</sup>——に比定せられているのは、何としても内陸に過ぎるように思われる。

さて Siy. 川国の別名 Zippasla 山国の、その Zippasla<sup>29)</sup>山には、Cadmus 山塊またはその主峯を宛てるのが適当であることは言うまでもあるまい。Madd. 文書の §4 (I 16-17) に、「汝 Madd. は、兵を率いて Zipp. 山国に在住すべし、Zipp. 山国に背を向けおくべし」との句が見えるが、この引用文の後半は、Zipp. 山=Cadmus 山塊を背面に負うて、同山の南面乃至西南面に守備の軍を配し、西南方面よりする Arzawa 国または Ahhiyawa 国の脅威に対して、防衛の第一線を受け持つ義務を示したものと読むことができる。かくして、§5 (I 23) の Madd. がこれに答えた「余は、この国々の衛戍兵かつ哨戒兵 *lūauriyalaš lūuškiškatalašša* たるべし」という言葉も、滑らかに読み下すことができよう。

なお、始めの引用文に引き続き (I 17)、別の機会に Madd. はまた「Hariyati 山国に住むべし」と命ぜられたことがある旨が記されているが、Hariyati 山というのも、Cadmus 山塊中の一峯であって、同じ Zipp. 山国の中で居城を移すことを命ぜられたことがあるのであろう。

文書の §6 に至って、この当時の Arzawa 領主 Kupanta-Innaras<sup>30)</sup> を目標とする Hatti 王と Madd. との攻守同盟の趣旨が述べられ、かくしてここに、Zipp. 山国に Madd. を授封した狙いの一つは、特に Arzawa 本国の動きを牽制するにあったことが知られる。しかしながら Madd. は、やがて Hatti 王の指令によらずして、ほしのままに Arzawa 国と事を構えようとし、しかもかえって Kup.-Inn. 王の先制攻撃を受けて、戦破れ、身をもって逃れるという窮境に落ちた (§§ 8-9)。このとき Madd. の一族が Arzawa 軍の進撃を避けて逃げ込んだ岩山 *NA<sup>4</sup>piruna* というのも、Cadmus 山中の要害險阻の地であろう。この語はいかにも普通名詞には違いないが、あるいはその名をもって指せば、明らかにどこを示しているかが諒解せられる特定の山塞を指しているのかも知れない。ところでここに窺った Madd. の一族は、やがて Arzawa 軍に捕えられたが、間もなく出動し来った Hatti の將軍の率いる軍勢の力で、Sallawassi において救い戻されることができた (§ 10, I 54-55)。Sallawassi は、上記の岩山から Arzawa の首都に至る間の地点であろうが、それ以上の詳細は、知ることができない。

次に (Madd. § 12)、Madd. は、例の Ahhiya 人 Attarissiyas の攻撃を受け、またしても Hatti の將 Kisnapilis の救援のおかげで辛うじてこれを撃退することができ

## ヒッタイト歴史地理考(Ⅱ)

た。かように Ahhiya の海上からの攻撃にさらされていた所をもって見れば、どうしても Madd. の所領は、エーゲ海に臨んだ地方、少なくとも海からはあまり遠くない地方でなければならず、Gurneyらの Siyanta川国=Zippasla 山国に擬する Pisidia とその北方とを含む山地は、あまりにも内陸奥地に偏り過ぎていると言わざるを得ない。

かくしていよいよ話は Luqqa をめぐる紛争の段に入る (Madd. § 13 et sqq.)。Luqqa = Lycia の一市 Dalawa = Tlos に Hatti の主権を脱しようとする動きがあり、Madd. は、この機運に乗じて、裏面では Dalawa 市と気脈を通じながら、裏は Hatti 王への忠誠を装うて、Dalawa の動きを Hatti 側に報じ、言葉巧みに將軍 Kisanpilis を Hinduwa = Candyba の攻撃におびき出しておき、一方 Dalawa の軍を出動せしめて、將軍 Kisan. の退路を断ち、かくしてこの將軍を戦死せしめると共に、Dalawa 市を自家薬箆中のものとなすという二重の成果を、しかも自らはほとんど刃に血ぬらずして、手におさめた。

ところで、Kisanpilis の敗死について、これに至る経過をいまいし詳しくいうならば、Madd. は Kisan. に、Luqqa 方面に叛乱の兆があることを通報し、自らは Dalawa = Tlos の鎮圧に出動するから、Kisan. は Hinduwa = Candyba の攻撃に当たられたいとの作戦を提案したのであった (Madd. § 13, I 66-67)。かような提案が出て、しかも Kisan. がこれに遅疑なく応じたことから当然考えられることは、Madd. と Kisan. とが、Tlos と Candyba に関してほぼ対称の位置に駐していたことである。今 Gurney らの観点に立って、Madd. の所領を Pisidia およびその北方の山岳地とし、その居城を Zippasla 山 = Dindymus の南麓辺りとした場合、この点について、Madd. と Kisan. との位置関係は、どのようなことになるか。Kisan. の駐屯地を Sallapa = Pessinus とすれば、Dindymus 山と Pessinus とから Lycia までは、直線距離にしてもそれぞれ約 350km および約 400km を数え、第一に重畳たる山岳地を越えて距離が遠過ぎる上に、これでは東京と宇都宮とにいる二将が、京・大阪の乱を鎮圧するについて、予め作戦目標の分担を協定するようなもので、何としても奇異の感じを免れることができない。さらに、続く § 14 (I 69) に、「しかるに Madd. は全く Dalawa へ出動しなかった」とあるが、Madd. が Dindymus 山麓の居城から全く軍を動かすことなくして Kisan. にその事実を隠蔽し、Kisan. ひとりを Candyba へ出動せしめるようなことが果して可能であったかどうか、この点はほとんど不可解というほかない。また仮に Kisan. が Gurney らの Pitassa 国すなわち Sultan Dağ の東側の丘陵地から出動したとしても、事情はほぼ同様であり、Madd. 文書の記述する事実には明快な説明を与えること



はできない。これに反して、筆者のように、Madd. は、Siyanta 川=Calbis Fl. の西、Cadmus 山の南方にあったとし、一方 Kism. については、この将軍が Pitassa 国=Pisidia 地方を預っていたものとすれば、両者は、ほぼ 150 km の距離から——国境を基準にとるならば、6~70 km の距離をおいて——Tlos と Candyba の両市を相挟むような位置関係にあったことになり、文書に記載された諸点は、誰人の眼にも無理のない解釈を得ることになる。

KisnapilisをCandybaの戦に討死せしめてからのちの Madduwattas の作戦行動は、鮮やかな快調をもって着々と一手一手が進められて行く。思うに、先に Attarissiyas の攻撃を受けたとき、これが撃退のために Madd. がその救援を仰いだ Kism. は、おそらく戦の駆引きに長じた智勇の将で、Madd. にとっては目の上の瘤ともいうべき厄介な存在であったのではあるまいか。

ともあれ、Madd. は、次の手として、政略結婚の策によって、かつての敵 Arzawa 国の Kupanta-Innaras と手を結び (Madd. §§ 15 et sqq.), しかるのち Hapalla 国にその触手を差し延べ (§§ 22-23), ついで Luqqa の諸市 Zumanti, Wallarimma (=Hyllarima), Iyalanti (=Alinda), Zumarri, Mutamutassa, Attarimma, Suruta, Hursanassa を奪って、己が掌中に収めた (§ 24). かくして遂に Pitassa 国を煽動して、この地方をも叛乱の渦中に巻き込み (§ 27), その他数々の背信行為を重ねるに至って、Hatti の王からは、改めて詰問の書信が寄せられて、Hapalla 国の返還を要求せられた (§ 28)。このとき、Madd. は、この詰問状に対して何と答えたか、曰く、「Hapalla 国は、いかにも本来が Hatti 国の所属であるが、Iyalanti, Zumarri, Wallarimma は、自分が刀にかけて切り取った所である」と (§ 28, II 57-58)。その他文書の末尾に至って、Karkisa 国の名<sup>31)</sup>と、および一般に Cyprus 島に当たると認められている Alasiya 国の名<sup>32)</sup>とが見えるが (§ 35), この部分は原文書の欠損が多く、脈絡が明らかでない。文書の最後には、「Madduwattas の不法行為 wastul の(記録)の第一枚目」なる奥書があり、従って原文書は、少くとも二枚以上にわたったことが知られるが、第二枚目以下は失なわれて、上に記した以上のことは知る由もない。

さて、Alinda=Iyalanti, Tlos=Dalawa, etc. は、いずれも Lycia, Caria 方面の都市であるが、Zippasla 山国=Siyanta 川国を、筆者のように、Siy. 川=Calbis Fl. の西岸に比定するならば、Madd. が始めにその勢力下に収めた Dalawa は、彼の所領の Siy. 川国からは東、すなわち固有の Lycia にあり、Arzawa 国の Kupanta-Innaras との提盟の後に奪い取った Iyalanti は、Siy. 川国から見て西北の方向に当り、丁度

Arzawa と Siy. 川国との間の位置を占めることになる。

ここで改めて、Madduwattas の勢力拡張の跡を顧みてみると、i) まず Dalawa = Tlos における叛乱の機運を巧みに利用して、Madd. の野心にとっては、もっとも煩らわしい存在であった西南方面の探題 Kisnapilis を除くことに成功するとともに、国境 Siy. 川 = Calbis を東に渡って、Xanthus 川辺の Tlos を味方に付け、ii) 翻って、西北の Arzawa 本国との間に友好関係を打ち立てて、後顧の憂を絶ってのち、iii) Calbis 中流の東岸に当る Hapalla 国 = Cabalis 地方——この比定については後述する——を取り、iv) 次には、Arzawa 本国との間に横たわる Luqqa の諸市——Iyalanta = Alinda, etc.——を奪い、かようにして Caria を中心とする半島の西南部の一帯に自己の地歩を確立したのち、v) Hatti の本国を指向して、東北の Pedassa = Pisidia の山岳地帯に叛乱の火の手を煽り、騒擾を起さしめるに至ったというように、その経過を跡付けることができる。すなわち、筆者に従って、Madd. の授けられた領土を Calbis 川の西に比定するとき、Kisnapilis の討死から後の Madd. の作戦の一手一手は、自己の根拠地を中心におきつつ、全体的な計画性と計算の上に立った秩序とをもって着々と進められたものとして、明快な像を結ぶように描き出すことができるが、Gurney らに従って、Madd. の所領を Pisidia とその北方の山岳地と見るかぎり、Madd. の乱におけるこの野心家の作戦行動は、脈絡を欠き、その時々偶然に支配された場当りのなものとし解釈の法がない。

以上、Madd. 文書を主たる拠り所として、Madduwattas の授けられた所領 Zippasla 山国 = Siyanta 川国は、i) ほぼ Mira 国に等しいが、同国よりも広い境域を含み、ii) Siyanta 川 = Calbis Fl. の西岸、Zippasla 山 = Cadmus 山の南方の、海に至るまでの地を指すと考えるのが適当である所以を述べた。次いで、Hapalla 国の境域について考察を試みる。

### c) Hapalla 国について

GGG の記述とは順を逆にして、Seha 川国よりも先に Hapalla 国の位置と境域を考察するのは、上に見たように、Madd. 文書の中にこの国の名が現われたからに他ならない。

Hap. 国については、Madd. 文書のほか、この国の王 Targasnallis と Mursilis II との間に結ばれた条約<sup>33)</sup>があるが、この文書は、国境に関する記述の部分に欠損しているので、条約そのものは、同国の地理を究める資料としては、あまり役に立たない。

一方、名称の類似を根拠として、Cornelius は、Hap. 国を古典期の Cabalis すなわち Calbis 川中流より東の、Pisidia 南西角に至る地方、すなわち、筆者の Pitassa 国と Luqqa=Lycia との間に挟まれる地帯に比定しようとするが<sup>34)</sup>、Gurney らは、Hapalla の名と Cabalis の名との申し分のない一致<sup>35)</sup>にも拘わらず、これをはるか北方の Cuballum すなわち Senarus 川と Cayster 川のつくる線の北側の地方に比定しようとする<sup>36)</sup>。Hapalla 国の地理について諸種の文書が暗示する所の事実は、果していずれの比定に軍配を揚げしめるであろうか。

1°) まず Suppiluliumas (ca. 1380-40) または Arnuwandas II (ca. 1340-39) の当時の一記録 (KUB XIX 22) に、將軍 Hannuttis を「下の国 Kattera Udne」に遣わして、これを基地として Hapalla 国を討たしめたとの記事がある。「下の国」とは、いうまでもなく「上の国 Sarazzi Udne」に対する呼称であって、高原の地勢の低い部分、すなわち、Halys 川の大彎曲の西南外側に当り、大塩湖 Tuz Göl をめぐって、ほぼその東南から西南乃至西方にかけて扇状に拡がる所の大盆地——古典期の地理でいえば、大凡 Isauria・Lycaonia から Phrygia Magna に及ぶ方面を指していることは、すでに広く認められている通りであるが、Gurney らは、もし Hapalla=Cabalis とするならば、「下の国」を基地として Hap. 国を討つためには、山嶽重疊たる Pisidia 地方を通過せねばならず、この間において Furculae Caudinae の危険を冒す恐れがあり、従って、「下の国」から Cabalis を目標にして軍を進めたりする筈はなく、従って Cabalis が Hap. 国に当たることはあり得ないという。果してかような論証が絶対的な妥当性を持し得るであろうか。思うに、「上の国」「下の国」といった呼び方には、あたかも我が国において関東と関西を対立せしめて呼ぶに似た趣きがあり、必ずしも厳密に一義的にどれだけの範囲を指すかの確定した名称ではなく、多少とも融通性とともな漠然性を含んだ呼称であったことも考えられよう。しかりとすれば、「下の国」と言った場合にも、単に厳密に地勢の低い高原中央部南寄りの大盆地のみには限定せず、もっと包括的に西南の「下の国」方面一帯を指した場合もなくはあるまい。かくして、実際の地形上は低地ではなくても、Pisidia 方面すなわち筆者の Pitassa 国に宛てる険阻な山岳地も、広い意味の「下の国」方面のうちに含めて名指されていた可能性も充分にあり得るであろう。Hannuttis が Hap. 国を目指して軍を進め来ったとき、「Lalanda 市は、將軍到ると聞かや、一戦に及ばずして和を求めた」とあって、不幸にして Cabalis の方面には、Gurney らが Amorium の西方11哩に指摘する Lalandus<sup>37)</sup> に拮抗しようような古典期の地名を挙げることはできないが、古典期に類似の地名がないことは、

上に引いた文書の Lalanda 市がこの方面に存しなかったことの確証たり得ないことはいうまでもない。従って、Hannuttis は、Hapalla=Cabalis 鎮圧のため、「下の国」の方へ出陣して、進んで Pitassa 国=Pisidia にまで兵を進め、この報に接して、Cabalis 乃至 Pisidia の某地にあった Lalanda 市は、干戈を交えるまでもなく、Hannuttis の前に乱を治め、かくして將軍は、さらに進んで、Hapalla=Cabalis の討伐に向ったと解することが不可能ではない。

2°) Hap. 国については、次に、Mursilis Ⅱ 十年年代記の第 4 年目の記事に、Arzawa 征服ののち、Mira 国の Mashuiluwas, Seha 川国の Manapa-Dattas と並んで、Hapalla 国の Targasnallis が、Hatti 国の大王の臣下の列に加えられたことが語られているが (KBo Ⅲ 4 Ⅲ24-25), 記事はこれだけに止まり、Hap. 国の位置関係について示唆を与える記述は何もない。

3°) 次いで、Murs. Ⅱ の嗣子 Muwattallis (ca. 1306-1282) が、Wilusa 国王 Alaksandus に対して結んだ条約<sup>38)</sup>に、Alaksandus, Piyama-Innaras, Kupanta-Innaras と並んで、Urahattusas の名が見え<sup>39)</sup>, Piy.-Inn. と Kup.-Inn. とは、夫々 Arzawa 王と Mira-Kuwaliya 王とであるから、Urahattusas はすなわち、Hap. 国王 Targasnallis の継嗣者であると察せられるが、ここからも Hap. 国の地理については、何らの示唆も得られない。

4°) Muwattallis の孫 Tuthalijas Ⅳ の世に至って、同王の年代記に Hapalla 国の名が見えるが、この年代記は、不完全であって、数個の破片から僅かにその一斑をうかがい得るに過ぎない<sup>40)</sup>。Hap. 国の名は、多くの国名の列挙された間に認められる、曰く、「×国, ×国, Arzawa 国, ×国, ×国, Apkuisa 国, Seha 川国, ×国, ×国, Pariyana 国, ×国, ×国, Hapalla 国, ×国, ×国, Arinna 国, Wallarimma 国, ×国, ×国, Hattarsa 国」<sup>41)</sup>。以上のうち、Apkuisa と Hattarsa については、全く手がかりがないが、i) Arzawa 国は、前提に従い、Gurney らおよび Cornelius とともに、ほぼ Lydia を指すとす。ii) Arinna は、Lycia の Arīna=cl. Xanthus に、Wallarimma は、Hyllarima に当ることを認める<sup>42)</sup>。iii) Pariyana も、Gurney らおよび Cornelius とともに、Priene に当るものとする<sup>43)</sup>。iv) 最後に Seha 川国は、後述するように、Hermus 川上流を指すものとする<sup>44)</sup>。かような 4 項を前提として考えるならば、これらの諸地名とともに列挙せられて、しかも Pariyana=Priene と、Arinna=Xanthus, Wallarimma=Hyllarima との間に挟まってその名の見出だされる Hapalla 国は、Gurney らの説くように、はるか北方の Phrygia Parva の方

面に比定するよりは、西南方の Cabalis に擬する方が合理的で自然であることは、縷説を要しないであろう。

5°) 最後に、上の b) **Siyanta** 川国の所で引用した Madduwattas 文書 §28 の、Madd. が Hatti の王に答えた言葉が、これまた我々の見方を支持するべく登場する。すなわち、Madd. の答えに曰く、「Hapalla 国はいかにも、元來が Hatti 国に属した所であるが、Iyalanti, Zumarri, Wallarimma は、自らの刀にかけて切り取った所」という。我々の見方に従って、Hapalla=Cabalis とするならば、Iyalanti 等の諸市と Hap. 国とは、共に半島の西南隅 Lycia 方面の地であって、Siyanti 川国を中にして、その西と東の地域が対照されているのであるから、上記の Madd. の答えを自然に読み下すことができるが、Gurney らのように、Hap. 国を cl. Dindymus 山=tk. Murad Dağ の北方 Phrygia Parva の方面に擬するのでは、Luqqa の諸市と Hapalla 国とは、江戸と長崎のようにかけ離れてしまい、何故に Madd. は、Hap. 国の返還を求められたとき、Iyalanti 等の諸市を引合に出す要があったものか、全くこの点を理解することができなくなる。

以上のようにして、いかなる点よりしても、Hapalla 国は、Lycia の北に接し、Mira 国乃至 Zippasla 山国=Siyanti 川国からは、Siyanti=Calbis 川を境にしてその西に隣る Cabalis 地方に比定するのがもっとも適切であると考えられる。最後に、Seha 川国の地理を考察して、Arzawa 諸国の歴史地理を結ぶことにしよう。

#### d) **Seha** 川国について

Mira 国が Kuwaliya 国と併称せられたように、Seha 川国は Appawiya 国とともにその名の挙げられることが多かったことを始めに述べておく<sup>45)</sup>。

この国についても、Murs. Ⅱ がこの国の王 Manapa-Dattas と結んだ条約<sup>46)</sup>があるが、遺憾ながら、Hapalla 国の条約の場合と同様、国境線の詳細については、記述が欠けているので、やはりこの場合も、同条約のほか、各種の文書に散見する言及からこの国の位置に関する示唆を拾って行かねばならない。

まず、大勢として、次のような状況を考慮に入れておくことができよう。Arzawa 征服ののち、Murs. Ⅱ が諸王に授封した三国——Mira 国、Seha川国、Hapalla 国——は、Arzawa 本国に強大な王権が復活して、Hatti 国の脅威をなすような形勢がもしも生じた場合、かかる脅威の直ちに Hatti 本国に及ぶことを多少とも緩和し、防止する意図のもとに設置せられたものであることは、疑問の余地がない。ところで、これ

ら三国のうち、Mira 国が Hattus の都より Arzawa へ向う進軍の路線上当ったことは、Murs. Ⅱ の Arzawa 遠征に際して、同国の Mashuiluwas 王が Aura まで Hatti の大王を迎えに出たことから察せられる所であり、またすでに我々の比定においても、この国には、Hatti と Arzawa 本国とを結ぶ線上にその位置が与えられた。しからば次に、Hap. 国と S. 川国とに対しては、Arzawa 本国 ← M.-K. 国 ← Hatti 本国を結ぶほぼ東西方向に走る路線のおよそ南北両翼に当る見当にその位置を求めるのがもっとも合理的であることはいうまでもなからう。さて今、Hap. 国に対して、M.-K. 国からいえば南側に当る位置が比定された以上、Seha 川国に残された位置は、ともかく M.-K. 国と Arzawa 本国から見て北の方角においては他にあり得ないことになるのが当然であろう。

第二の要請として、Seha 川国と、川の名をもって呼ばれる以上、その Seha 川そのものは、かなりの大河でなければならない。Gurney らおよび Cornelius が、この国を Arzawa 本国より北方に求めた所まではよいが、Seha 川そのものに宛てた cl. Caicus=tk. Bakir Çay は<sup>47)</sup>、何としても一国の名称の抛り所たるべく、あまりに小さすぎるように思われる。小アジア西岸の大河といえば、まず第一は、cl. Maeander=tk. Büyük Menderes に、次いで第二は、cl. Hermus=tk. Gediz Nehr に、指を屈すべきが当然であろう。

しかしながら一方、これらの両大河の下流流域は、すでに Arzawa 本国の領域に宛てられているのであるから、Mira-Kuwaliya 国のほぼ北に接するという条件を考慮に入れるならば、Seha 川国に擬すべき地域としては、Maeander 上流または Hermus 上流の流域以外の地方は考えることができないであろう。

他方、S. 川国の位置を決定するべく、文書の方から供せられる Data の第一は、先に引いた Alaksandus の条約の § 11 (KUB XXI 1 II 75-76) である。この項には、もし Wilusa の Alaksandus 王において、S. 川国または Arz. 本国における不穏な動きに関し、何らかの情報に接することあるときは、かならずこれを Hatti 王国に通報すべき義務のあることが謳われているのであるが、かかる条項を通して直ちに推知せられることは、Wilusa 国が S. 川国および Arz. 本国に境を接していたことでなければならない。今仮に、Gurney らに従って、Wilusa=Ilion, Alaksandus=Alexandros の比定を承認し、Wilusa 国を小アジアの西北、のちの Mysia の方面に置くならば、Arzawa 本国と相並んで、Wilusa=Mysia のほぼ南面に接すべき Seha 川国の領域としては、Hermus 川上流の、同川の支流数多によって縦横に灌漑せられている水郷地帯 Maconia

方面を想定するのがもっとも適切であろう。

文書そのものから提供される Data の第二としては、保存される所はわずかに数行を出でないが、Manapa-Dattas の書信の残簡なる KUB XIX 5 を挙げねばならない。宛名は何王であったか——Mursilis II か、その嗣子 Muwattallis か——も明らかでないが、Tawagalawa 書信<sup>48)</sup>に登場する Piyamaradus と Atpas との名が見え、おそらく、この書信は、その Atpas が Lazpa 国を襲ったことを Hatti の大王に訴えるために書かれたものかと察せられる。Lazpa 国は Lesbos 島に他ならないとするならば<sup>49)</sup>、Lesbos 島は、Manapa-Dattas の所領であったようにも解されるし、少なくともこの島は、Seha 川国から去ることあまり遠くはなかったものと考えねばならない。Atpas や Piyamaradus の急襲に脅威を受ける Manapa-Dattas 王の所領 Seha 川国は、ともかくエーゲ海からあまり隔っていた筈はなく、従ってこの国は、あるいは Seha 川=Hermus の川筋に沿うて、かなりの下流まで帯状に西へ突出していたものかも知れない。

Seha 川国の領域としてほぼ上のような地域を想定するならば、この国について他の文書の供する所の記述は、おおむねこれを難なく説明し去ることができる。

まず、Hapalla 国の項に引用した Tuthalijas IV の年代記の断片は<sup>50)</sup>、その始めに (KUB XXIII 13 1-4)、S. 川国の叛乱について述べ、これに続いて「Ahhiyawa 王は退ぞいた」ことを告げる (ibid. 5)。前後の contextus の充分でないこの断片からは、この Ahhiyawa 王が、S. 川国の側に立っていたものか、Hatti 王の側に味方していたものが明らかでないが<sup>51)</sup>、ともあれ、エーゲ海から遠くない地域に想定されている我々の S. 川国に対して、「Ahhiyawa 王が退ぞいた」という記述はよく適合している。

次に、Manapa-Dattas の条約の §4 および Mursilis II の年代記の第4年目の記事 (KBo III 4 III 10-23) から、Murs. II は、Arzawa 征服ののち、この戦において Arz. 国を支持した Manapa-Dattas を罰するため、軍を S. 川国の方に向けようとしたが、同王は、Murs. II に使を送って、宥恕を懇願し、かろうじて許されるを得たこと、かくして Murs. は、S. 川国討伐を止めて一まず Mira 国まで引揚げ、いよいよ首都へ向って凱旋の途上、Astarpa = Lycus 川東岸の Aura で S. 川国の使節を接見したことなどが知られるが、これらの記事も、Seha 川国が Arzawa 国 → Mira 国 → Hattus の道の北にあったとする想定により、ごく自然に読解することができる。

最後に、S. 川国に付随して挙げられる Appawiya に関して一言する。Gurney らも Cornelius も、Appawiya は、Abbaitis に比定しようとする<sup>52)</sup>。筆者もこの比定に同

## ヒッタイト歴史地理考(Ⅱ)

調したいが、この場合、Hermus 川上流の Maeonia 地方は、その東北において直ちに Abbaitis と境を接しているのであるから、ここでも、Gurney, Cornelius に従って、Seha 川国=Caicus 流域とした上で Appawiya=Abbaitis とするよりも、筆者のように、S. 川=Hermus Fl., S.川国=Maeonia, App.=Abb. と考える方が、Seha 川国と Appawiya 国とのしばしば併称される事情を説明するのに難が少ないであろう。

以上を要約して、i) Seha 川はすなわち Hermus 川に他ならないこと；ii) Seha 川国の境域は、Mira-Kuwaliya 国——というよりもむしろ Kuw. 国の Maeander 川対岸より Hermus 川上流流域に至り、従っておよそ古典期の Maeonia に相当すること；iii) Appawiya 国は、この地方の東北に隣接する古典期の Abbaitis に当ること、の三点をもって、Seha 川国に関連する地理の考察の結論とすることができる。

### e) その他

最後に、この機会を利用して、地名学上の事実などについて、補足的な雑考二、三件を付記しておきたい。

今試みに、例えば、Schachermeyr, Die ältesten Kulturen Griechenlands の附図を開いて<sup>53)</sup>、小アジアにおける -nd-, -ss- を含む古典期の地名の分布を概観してみよう。両者ともに、Halys 川彎曲の西外方、Sangarius 川の東側に当る地帯、すなわち半島の北中央部に、一見直ちに注目を誘う空白を残して<sup>54)</sup>、その分布は、半島のほぼ全域——東北は Armenia の山地から南部一帯を経て西北の Troia 方面にまで及んでいるが、就中この種の地名の密集しているのは、半島西南角の一帯——Pisidia, Lycia, Caria 方面であることが認められる。

かような地名学上の事実は、何を物語っているか。

まず、前提として筆者は、Laroche 氏の Onomastica 研究多年の成果に従い、-ss- の形成法は、luw. 語に属し、-nd- の形成法は、heth. または luw. に属することを認めたい<sup>55)</sup>。ここで特に注目すべきものは、いうまでもなく、luw. のみに特有な接尾辞 -ss- である<sup>56)</sup>。luw. に属する -ss- 接辞を含む地名が上のような分布を示す事実を説明するおそらく唯一の解釈は、i) Luwi 族は、Heth. 族に先駆けて Caucasus を越えて Anatolia に入ったこと、ii) 背面からする Heth. 族の圧迫に促がされて、次第に西南方向へ移動せざるを得なかったこと、iii) かくして一まず Pisidia の山塊から Lycia, Caria 方面にやや安定した定住地を見出だしたこと、iv) しかしながらやがてこの方面を根拠地として、エーゲ海の島々に進出するとともに、一方では海岸沿いに北



上して Troia の方向へ向っても植民地をひらいて行ったことというに帰するであろう<sup>57)</sup>。やがてこの方面において、Luwi 族は、Balkan を南下し来った Hellenes と接触することになるのである。

ともあれ、今特に注意したいのは、-ss- の地名の分布の示す証拠が、Luwi 族の勢力の中心または根拠の、元来は Caria, Lycia, Pisidia 方面にあったことを暗示している点である。いかにも Mursilis II が征服してしまった当時の Arzawa の勢力圏は、Lydia の Hermus川方面にまで及んでいたものかも知れないが、Luwi 族の勢力の本拠は、Macander または Cayster の流域、Ephesus=Apasa の都の辺りまでであったのではないか。かような点から考えても、Luwi 勢力を目標とし、これに対処するための前進基地 Sallapa は、GGG のように Pessinus とするよりは、もっと西南に進めて、少なくとも cl. Acroenus=tk. Afyon Karahisar に擬する方が適切なのではないかと思われる。

これと関連して、前稿(本誌第7号, p. 13)に述べた所につき、再考を加えて、若干の修正を施しておきたい。Gurney らによれば、Pamphylia には、鉄器時代より前にさか上る集落の趾は存しないという(GGG p. 84)。また Götze, Kleinasien (1957), p. 179 にも、Silifke より Miletus に至る間の小アジアの南岸・西南岸には、鉄器時代以前の集落趾が全く発見されることが報ぜられている。かような事実と、luw. 語の形成法による地名がこの方面に密集している事とは、いかにして調和されることができるのであるか。

今 Strabo を繙といて、Lycia, Pamphylia の章(XIV. 3-4=§§ 664-667)に目を通してみると、この地帯の諸市は、その多くが臨海の港市ではなく、海岸線からは幾らか退いた内陸に建設せられていることが注意せられる。具体的に云えば、Lycia, Pamphylia の章に挙げられた21の都市のうち、内陸都市は、Karmylessus, Pinara, Letoum, Myra, Limyra, Phellus, Antiphellus, Chimaera, Termessus, Perge, Syllion, Aspendus の12を数えるに対し、沿岸都市は Telmessus, Patara, Phaselis, Side, Ptolemais の5に過ぎず<sup>58)</sup>、しかもこのうち Side, Ptolemais のごときは、かなり後代の植民都市かと思われる。

一方 Pisidia の章(XII. 7. 3=§ 570)に次のような記述が見出だされる：「この地方の自然たるや驚嘆すべきものがある、すなわち、Taurus 山脈の峯々の間に数万(の人口)を養うに足る極めて肥沃な国土があり、その幾多の地区に橄欖樹と見事な葡萄樹が茂り、ありとあらゆる家畜のために無尽蔵の牧野を供している、しかしてこの国を取

## ヒッタイト歴史地理考(Ⅱ)

り巻いて(山々には)各種の樹木が森をなしている。」かような記述を通じて Pisidia の山岳地帯は、一見した所は、山稜峨々たるがごときその地勢上の外容にも拘わらず、案外人間の生活に適した地理的条件を備えていたのかと察せられる。しかりとすれば、Luwi 族が、まず始めには、一方では天然の要害恃むべく、しかも高燥にして自然の資源に恵まれた Pisidia の山地に根拠を定め、しかるのちその勢力拡張の途を豊沃な西方の海岸平野の方向に求めて行ったという想定は、あり得べきこととして受け容れることができるのではないか。かように Pisidia 方面が Luwi 族勢力の根源であったとすれば、Pitassa 国=Pisidia へ向って Arzawa 方面から度々叛乱を唆のかす働きかけが試みられた事情も一層よく合点が行くであろう。かくして、Luwi 族の移動の段階を上のように想定することにより、-ss-地名の分布の密度が Pisidia, Lycia, Caria の方面に濃い事実と、Pamphylia, Lycia の沿岸地帯に鉄器時代より以前の集落跡の見出だされない事実とは、矛盾なく両立するように解釈を下すことができると考えられる。かような観点よりして筆者は、Pisidia の山地の Tell を扱ひ、大規模で組織的な発掘の鉞が一日も早く揮われんことを期待せずにおれない<sup>59)</sup>。

## む す び

上の考察の通りに、Luwi 族の根拠地が元来は、Pisidia から Lycia, Caria の内陸部の方面にあったとしても、前14世紀に至って Mursilis II の征服する所となった頃の Arzawa 勢力の基盤は、Apasa=Ephesus を中心として Caria より Lydia に至る、Maeander, Hermus 両河流域の沃野にあったのであろう。Apasa その他この方面の海港を経てする海上貿易も、Arzawa 国の富強を致す上に与って力があったことであろう。Caria 南部乃至 Lycia 西部が、Ephesus に都する Arzawa 政権に対してどのような関係にあったかは俄かに断じ難いが、たとえ直接に Arzawa 王朝の統治下にあったのではなくとも、少くとも同じ Luwi 族としての連帯感があり、親 Arzawa 的な民族感情が強かったことであろう。

さて、Arzawa 征服ののち、Mursilis II から授封せられた Mira-Kuwaliya 国、Seha 川国、Hapalla 国の三国の布置は、筆者の比定に従うならば、Hatti 本国の方から見て、三国相連なって、Arzawa 本国と親 Arzawa 的な Luqqa=Lycia 方面の諸市とを包み込む態勢を取っていることになる。すなわち、三国の位置につき、個々にその比定を試みた結果、そこに得られたその全体像が、全体像としても、一つの統一性と一貫性を具えた姿を示しているということができよう。

かくして Hittite 期の Arzawa 方面の歴史地理につき、主として Gurney らの構想を批判しつつ、これにかなり大幅の修正を加えて、筆者は筆者なりの一つの構想を成すことができたが、繰り返すまでもなく、筆者の構想は、実に多くを——いなむしろ、ほとんど総てを Gurney らの多年の研究に基づく労作に負うているというも過言でないことを強調して筆をおく。

(1962, IX, 4) (筆者は大阪市立大学助教授)

## 註

- 1) luw. \*Ahhayawa: heth. Ahhiyawa として、luw. の語形を仮定すれば、一見奇妙な Ahhiyawa を説明することができる。詳しくは別の機会に論じてみたい。
- 2) Hinduwa=Cindyce と比定すれば、語形の対応は申し分ないが、Cindyce の位置は、Hinduwa に宛てるためには西に偏りすぎている (Strabo, XIV. 2. 20=§ 657)。
- 3) 動詞の意味はなお不明— Emm. Laroche, Dict. de la langue louvite, Paris 1959, s. v.
- 4) cf. 'Ελικών : ἔλιξ, ἑλίσσω.
- 5) GGG p. 82 ; Fr. Cornelius, RHA 62 (1958) p. 9.
- 6) Κολοφών は普通には、κολώνη, lat. collis, cello, lit. kálnas '丘' と同じ語根を含むとされる。
- 7) Kupanta-Innarus-Vertrag=Joh. Friedrich, Staatsverträge des Hatti-Reiches in heth. Sprache I, Leipzig 1926, S. 95-179.
- 8) GGG pp. 89-90.
- 9) 破裂音の場合、重子音のように記された -kk- ; -tt-, (-dd-) ; -pp- は、idg. の無声破裂音 -k- ; -t- ; -p- に、単子音のように記された -k-, (-g-, -q-) ; -t-, (-d-) ; -p-, (-b-) は、idg. の有声音 -g-, -gh- ; -d-, -dh- ; -bh- に対応している場合が統計的に多い : E. H. Sturtevant, A Comparative Gr. of the Hitt. Lang. I, New Haven 1951, pp. 26-7, 59-64.
- 10) Emm. Laroche, Gedenkschrift P.Kretschmer II, Wien 1957, p. 5.
- 11) luw. -ašši の語幹が、heth. に借用されるとき、-ašša と heth. 化されるようである : cf. Laroche, Dict. louv. pp. 138, 139.
- 12) cf. supra N. B. 11).
- 13) いうまでもなく、cl. Dindymus 山=tk. Murad Dağ に発して Eber Göl に入る内陸の C. 川である。
- 14) Siyanti 川とも書かれる、おそらく luw. Siyanti : heth. Siyanta の関係があるのであ

ヒッタイト歴史地理考(Ⅱ)

- ろう ; cf. supra N. B. 11).
- 15) -ura に終る地名については、本誌第7号の拙稿 p.20 においていささか触れる所があったが、問題はしかく単純ではないように思われるので、いずれ機を改めて同種の地名を一括して考究してみたい。
- 16) 本誌第7号 p.22.
- 17) Schachermeyr, Die ältesten Kulturen Griechenlands, Stuttgart 1955, p. 242 Karte 7. においては、Sinda がこの川筋にあったかのように記入されている。
- 18) 本誌第7号 p. 22.
- 19) GGG p. 90.
- 20) GGG p. 86 に従って、Aura=Amorion とするならば、この市は、GGG の Astarpa 川=Cayster を去ること少なくとも 170~180 stadia, すなわち優に 8里ほどはあろう。これでは、上に引いた条約の文言の意味を捕捉し難い。
- 21) Fr. Cornelius, RHA 62 p. 9 は、Astarpa=Maeander 川, Siyanta=Indus 川, Kuwaliya=Celaenae とする。
- 22) 後述するが、M.-K. 国の Mashuiluwas が Pitassa 国を使曠して、Hatti に叛かせたことがあったほか、Madduwattas も同地を根拠として P. 国を煽動して、乱をおこさせた、cf. GGG pp. 89, 91.
- 23) KUB XIV 1 および A. Götze, Madduwattas, Leipzig 1928.
- 24) Attarimma の地名が見出だされ、-immaは、luw. において受動分詞をつくる接尾辞であるから (Laroche, Dict. louv. p. 142 ; Joh. Friedrich, Hethitisches Elementarb. I, Heidelberg 1960, p. 193), この地名は、luw. 語の地名であろう。Attarissiyas の名は、この地名と同じ語幹 Attar- を含んでいるから、これも luw. 語の人名であろう。しかれば、この人物は Luwi 族の系統の Achaea人であろうか。Mycenae 文書 (KN X 1497, PY Sa 774) からも *Mo-qa-so* (=hier. heth. Muksas=phoen. Mps=gr. Μόψος) の人名が検出されており、Achaea 人の間に Luwi 族の系統の者が立ち交っていたことは、もはや疑い得ないであろう。
- 25) cf. Laroche, Gedenkschr. P. Kr. II, p. 5 ; Dict. louv., s. v. *ma-ad-du*.
- 26) GGG p. 81.
- 27) GGG p. 92.
- 28) vide supra p.13.
- 29) 同じ語根を含むと見える地名に、Hattus の都に近く Zippalanda がある。古典期の Sipylus 山の Sip- も、heth. または luw. の同じ語根 Zip- に発するものであろう。
- 30) Mira-Kuwaliya 国王の Kupanta-Innaras とは、同名異人である。

- 31) GGG p. 108 では, Anatolia の西北部, Troia のやや南に比定せられる。
- 32) 「銅と青銅を Alasiya から得た」ことが一文書に記されている (KBo IV 1 I 39)。Cyprus 島が銅の産出によって名高いことは言うを要しないであろう。cf. etiam Cl. Schaeffer, *Enkomi-Alasiya I*, Paris 1952, pp. 1-10.
- 33) Targasnallis-Vertrag=Friedrich, *Staatsv. des Hatti-R. in heth. Spr. I*, pp. 51-94.
- 34) Cornelius, RHA 62 p. 10.
- 35) Hapalla の単子音 -p- は, -b- に対応する, cf. supra N. B. 9)。また heth. Hapalla に対して, luw. \*Hapalli(s) と呼ばれたと考えることができる, cf. supra N. B. 11), 12), 14)。
- 36) GGG p. 100.
- 37) GGG p. 100 ; cf. ultro Laroche, RHA 69, p. 66 ; Joh. Sundwall, *Die einheimischen Namen der Lykier*, Leipzig 1913, p. 134.
- 38) Alaksandus- Vertrag=Friedrich, *Staatsv. des Hatti-R. in heth. Spr. II*, Leipzig 1930, pp. 42-102.
- 39) KUB XXI 1 III 32-33 ; GGG p. 102 に Arzawa 王として Manpa-Innaras の名が出ているのは, 明らかに Piyama-Innaras の誤りである。Seha 川国王は, Manapa-Dattas の後をその子 Masturis が継承した。
- 40) KUB XXIII 11, 12, 13, 27, 28 ; cf. GGG pp. 120-123.
- 41) KUB XXIII 11, 3-8.
- 42) GGG p. 79 ; 本誌第7号, p. 15.
- 43) GGG p. 98 n. 1 ; Cornelius, RHA 62, p. 10 ; Pariyana=Priene の最初の提唱者は, Em. Forrer であった (Klio, XXX, p. 171)。
- 44) GGG pp. 96-97 では, Caicus 川流域の Teuthrania をこの国に宛てる。
- 45) GGG p. 93 ; Manapa-Dattas-Vertrag, §5.
- 46) Manapa-Dattas-Vertrag=Friedrich, *Staatsv. des Hatti-R. in heth. Spr. II*, pp. 1-41.
- 47) GGG pp. 96-7 ; Cornelius, RHA 62, p. 10. Gurney, Cornelius を導いて共に Seha 川=Caicus Fl. の比定に至らしめた影には, この比定を最初に唱えた Forrer の説の示唆が働いているのであろう, Em. Forrer, *Forschungen*, Berlin 1926, p. 88 apud Cornelius, RHA 62, p.16 N. B. 64)。
- 48) KUB IV 3 I 48, sqq. ; cf. Ferd. Sommer, *Die Ahhiyawa-Urkunden*, München 1932, pp. 75 sq., 113 sqq. ; GGG, pp. 112-3.

ヒッタイト歴史地理考(Ⅱ)

- 49) Lazpa=Lesbos の比定は、古くから提唱され、かつ多くの人の承認を得ている: cf. Sommer, *Ahh. Urk.*, p. 291; Forrer, *MDOG* 63, p. 14; GGG p. 96, etc. さらに傍証を加えてみるならば、i) Lesbos 島出身の歴史家および同島 Mitylene の僭主 Myrsilus の名は、heth. Mursilis の名を想起せしめ、ii) 同島の Methymna<Māthymna 市の名は、luw. \*Madd<sup>a</sup>/imma にさか上る可能性があろう。この島は、Lydia, Caria 方面からエーゲ海に出た Luwi 族のもっとも濃密に植民した島の一つであったのであろう。
- 50) v. supra p.22 et N. B. 40).
- 51) Sommer は、*Ahh.* 王が親 Hatti の立場から S. 川国の乱を鎮めようとして成功しなかったと見る。Gurney らは、この乱を背後からそそのかしていた *Ahh.* 王が、Hatti 王出陣の報に接して俄かに海上に軍を上げたと見る: cf. Sommer, *Ahh.-Urk.*, pp. 315, 319; GGG p. 95.
- 52) GGG p. 97; Cornelius, *RHA* 62, p. 10.
- 53) op. cit., p. 242-Karte 7 et p. 243-Karte 8.
- 54) この地帯こそ、Gasga 族が Luwi 族の進出にも Hethite 族の攻撃にも頑強な抵抗を示して、その文化の浸透を寄せ付けなかった根拠の地であろうか。
- 55) Laroche, *Gedenkschrift P. Kretschmer* II, pp. 1-7; *RHA* 69, pp. 57-94; *Dict. de la l. louv.*, pp. 136, 139; cf. etiam A. Heubeck, *Bespr. üb. A. J. v. Windekens, Ét. pélasgiques*, Louvain 1960, *IF* LXVII, p. 201.
- 56) luw.-šš-(<\*-sk-) は、slav. 語派に顕著な所属の接尾辞 -(ŷ)sk- と同源であるかも知れない: cf. luw. iterativum-šš-: heth.-ššk-, gr.-σκ-; Laroche, *Dict. de la l. louv.*, p. 144; Friedrich, *Heth. Elemb. I* (1960), pp. 75, 191. luw.-šš-: slav. -(ŷ)sk- のこの語源解釈が正しければ、slav.-(ŷ)sk- は、germ. 語派からの借用ではなく、受動分詞の luw.-m(i)-, slav.-m(o)- とともに、古い形成法の luw. と slav. に残った一例とも考えられよう。
- 57) cf. Heubeck. loc. cit. N. B. 55); 岸本通夫, *世界文化史大系(オリエントⅠ)*, 角川書店 1960, pp. 97-98; *世界の歴史Ⅱ*, 筑摩書房 1960, pp. 149-51; *西洋古典学研究Ⅵ*, 岩波書店 1961, pp. 3-6.
- 58) Cragus, Olympus, Olbia, Attaleia の4市については、沿岸都市か内陸都市かの明記がない、いずれにせよ、このうち Olympus, Olbia, Attaleia は、古い市ではなく、後代の植民市であろう。
- 59) この方面からは、土器類の出土が散発的に報ぜられているに過ぎない; A. Götze, *Kleinasiens*, 1957, pp. 20, 33-34.